

令和8年度 第2回白馬高等学校学校運営協議会 議事録（概要）

1 日 時 令和8年（2026年）7月4日（土） 9時30分～11時30分

2 場 所 白馬高校会議室

3 出席者 委員 14名

以下敬称略

- ・太田伸子（白馬村議会議長）
- ・笹川陽子（めぞん・ど・ささがわ）
- ・松澤忠明（前 PTA 会長）
- ・白戸 洋（松本大学総合経営学部観光ホスピタリティ学科教授）
- ・篠崎元嗣（白馬村立白馬中学校）
- ・丸山俊郎（白馬村長）
- ・中村義明（小谷村長）
- ・北村幸治（白馬山麓事務組合事務局長）
- ・石川順三（白馬高等学校長）

欠席委員

- ・武田彰代（大町市立美麻小中学校講師 元白馬村教育委員長）
- ・柴田友造（小谷村議会副議長）
- ・小林かおる（小谷村立中学校長）
- ・相沢さつき（同窓会副会長）

その他の出席者

- ・田中聡（高校教育課主幹指導主事）
- ・宮嶋直美（高校教育課主任指導主事）
- ・白馬村副村長、白馬村・小谷村教育課長
- ・白馬山麓事務組合白馬高校支援係局長補佐、主査、白馬高校魅力化コーディネーター
- ・白馬高等学校教頭、事務長

4 次 第

(1) 開会の言葉（北村保勝白馬高等学校教頭）

(2) 長野県教育委員会挨拶（田中聡高校教育課主幹指導主事）

○4月に県外から多くの入学生を迎えたところであるが、すでに来年度に向けた生徒募集活動も始まっている。6月20、21日に東京で行われた説明会では50組に近い中学生、保護者が白馬高校ブースに足を運んだと聞き及んでいる。

○学校からの情報発信については、HP がリニューアルされ、画像や動画を豊富に掲載。地域をフィールドとした学びが今まで以上に分かりやすくなっていると感じる。こうした取り組みを通して高校の理解が一層深まることを期待している。

(3) 学校長より挨拶（石川順三白馬高等学校長）

○本校の遠隔授業が6月に始まり、現在3～4回実施。本校の他に、蘇南高校、阿智高校、阿南高校など県境の中山間地校に対して遠隔授業が実施され、今後、小海、軽井沢、北部などにも進めていくようである。先進的な取り組みの一端を担う状況であり、遠隔授業の良いところ、悪いところをチェックしていくことになると思う。

○文化祭には五竜観光協会からの依頼を受け、アフリカ訪日生徒が来校予定。また24時間テレビの取材を受けることになっている。多様性を有した本校だからこそだと感じている。

(4) 報告事項

①学校より（石川順三白馬高等学校長）

○P6、令和8年度51名の入学生にアンケートを実施。

- P7以降は回答結果を集約。アンケートを実施したのがゴールデンウィーク前であり、中学3年生時点での「白馬高校のイメージ」が表れている。
- 「良い印象」、「悪い印象」は例年とあまり大差ない。進学実績の改善を図っていききたい。今年の3年生は大学進学希望者が多く、昨年度以上に進学率は伸びてくると期待している。問題行動に関して、SNS関連のトラブル等は見られるが、大きな問題はごく少数になっている。地域の方には、今の白馬高校を見ていただきたいと思う。「入学した理由」に関しては、本校の特色ある学び、自然を生かした学習や遊びに魅力を感じている生徒が多い。自由な雰囲気はこれからも大切にしていききたい。「体験入学等への参加率」は特に国際観光科に多く見られる。地域みらい留学に参加した生徒・保護者が体験入学に参加する流れができているため、こうした活動は継続していききたい。「普通科/国際観光科を選んだ理由」として、「国際観光科に入る自信がなく普通科を選んだ」という声もあったが、カリキュラム的に両学科とも大差はない。ぜひ普通科にも積極的に入ってもらいたい。「今の学校生活に満足しているか」という問いに対して、満足度は高め。寮生の中には、「地元の子と馴染みづらい」と感じている生徒もいるようだが、入学から日も経ち、少しは解消されているのではないかなと思う。
- P8「高校でやりたいこと」について。「民話」や「石碑」などのキーワードが見られる。中学校の段階で探究学習テーマを絞ってきており、中学校の探究活動が盛んに行われていると感じる。今年度は白馬フォーラムも白馬中学校と連携して実施する予定である。「困っていること」や「白馬高校がどんな高校だったら他校に進学した生徒が本校を選んだか（白馬中・小谷中出身者対象）」等の質問に対する回答も集約。昨年度と大きく違いはない。
- 普通科・国際観光科における「入学者推移」について。今年度の特筆する点は、白馬中・小谷中出身者合わせて19名の生徒が国際観光科に入学したこと。昨年度を上回る。国際観光科に対する認知度が高まっている様子がうかがえる。一方で普通科の希望者が減少しているのが懸念事項である。

<丸山委員>

- 「高校でやりたいこと 普通科」の回答で「民話」の文字が大きく書かれているのが印象的だが、これは母体数に関係しているか。

<石川校長>

- 普通科はそもそも11名しかおらず、一人二人が書くと、このような結果になり得る。

<松澤委員>

- 2学期に同様のアンケートを行う予定はあるか。

<石川校長>

- 学校評価等でその都度アンケートは実施しているが、反応がどう変わったかを見るために、新入生に改めて同様のアンケートを検討したいと思う。

②白馬山麓事務組合より（北村局長）

<北村局長>

- 全国募集活動について
- オンライン説明会、首都圏で行われる対面合同説明会、東京・名古屋・大阪での単独説明会、高校を会場とした体験入学、学校説明会を実施予定。地域みらい留学のオンライン説明会は、5月23日に合同説明会および単独説明会を実施した。今後も7月5日、9月12日に実施予定。参加者数は合同説明会62名、単独説明会21名。昨年度の参加者は15名であり、オンラインによる情報発信に一定の関心が寄せられていることが分かる。地域みらい対面合同説明会は6月20、21日に東京で実施。両日で380組（全体数）の来場があり、20日に24組、21日に23組の計47組に対応。昨年度行われた同規模の説明会では合計31組に対応したため、現時点では昨年を上回っている。全国から100校を超える学校が参加する中、白馬高校ブースの来場者は途切れることがなかったという報告を受けている。8月22、23日にも対面合同説明会を予定。東京での

対面説明会では、5月30日に銀座NAGANOを会場として実施し、3組対応。9月26日にも同会場で開催予定。名古屋、大阪での対面説明会は8月8日に名古屋、翌9日に大阪で行う。7月25日に白馬高校、公営塾、学生寮を会場とした体験入学、9月5日、10月24日には学校説明会を予定している。今後も高校と連携し、白馬高校で学ぶ魅力を全国の中学生・保護者に理解してもらえるように丁寧に伝えていきたい。

○学校案内パンフレットについて

○教育の特色を「本物と出会い世界に羽ばたく」という言葉で表現。普通科・国際観光科の教育内容である北アルプス学、山岳実習、観光英語など地域資源を生かした白馬高校ならではの学びを紹介。卒業生の声や進路実績を通じて、白馬高校が学力を伸ばすだけでなく、体験的な学びや多様な仲間との出会いの場であること、生徒一人ひとりの挑戦を支える学校であることを伝えるような内容となっている。

○寮のパンフレットについて。「住まいのサポート」という視点から、学生寮「しろうまパルハウス」、公営塾「しろうま学舎」、白馬村と小谷村両村による支援体制を紹介している。支援の目的として「地域に根ざしながらも世界に通用する人材づくり」、「地域の資源や人材を活用した魅力ある学校づくり」を示している。全体的に、白馬高校で学ぶ生徒が安心して生活し、学習に取り組み、地域との関わりの中で成長できる環境であることを伝える内容となっている。親元を離れて生活する不安に対して、生活面、学習面、地域での支援が届くことを示し、全国募集における重要な説明資料として活用できるものである。

<松澤委員>

○同窓会として説明会に関する情報を事前に提供してほしい。大阪、名古屋、東京のどちらで開催するか等の情報をもらい、付近にいるOBやOGに働きかけることを考えていきたい。

<北村局長>

○詳細な日程等が決まり次第報告し、情報を提供していきたいと考えている。

<笹川委員>

○昨年から改修工事が行われ、校舎内が明るくきれいになった。その辺りのことも、もっと地域の方々も含めてPRし、情報が伝わっていくとよいイメージを持たれるのではないかなと思う。

<石川校長>

○大きな宣伝効果になると思う。まだ改装中ではあるが、少しずつ地域に新しい校舎を開放していきたい。

<草本委員>

○寮のパンフレットについて写真は生徒たちが楽しそうに団らんしている様子などを掲載した方がよいと思う。「どのような場所で、どのような生活を送るのか」がイメージできた方が「行ってみたい」という気持ちにつながる。寮費の月6万円は当面据え置きなのか。

<北村局長>

○写真については更新していきたい。寮費については、昨年度の5万5000円から6万円へと改定した。白馬村の現在の賃貸状況を踏まえると、食費込みで6万円はだいぶ安い印象だが個室ではなく3人部屋であることを念頭に入れると、しばらくはこの値段で考えている。寮費関係については、国費（「新しい地方経済生活環境交付金の中の全国募集を行う自治体への交付金」と県費の助成も含まれる。国費の助成は、令和7～令和9年は現況の制度が維持されるが、それ以降は未定。場合によっては、寮費の改定等も検討する必要がある。昨今の物価上昇もあるため、その辺りも加味して検討していきたい。

<草本委員>

○苦労を重ねながら全国募集をする中で、今では定員いっぱいまで募集がある状況となった。そうした実践を反映した寮費になるとよい気がする。

<丸山委員>

○値上げの件は3年ほど前から話に出ていたが、当初の価格設定で入学してきた生徒・保護者のことを考えると、なかなか踏み込めずにいた。それ以上に物価上昇の現状もあるので、早め早めに検討し、保護者への説明責任を果たした中で行うよう指示は出している。

<草本委員>

○良心的な価格であると思うが、今後、実額に近づけていく中で「この寮費だと入寮が難しい」という優秀な生徒が出てくる可能性もある。その時には、奨学金制度の運用を検討されてもよいのではないかと思う。

<松澤委員>

○ふるさと納税をそうした方面に活用することも検討すべき。取るべきところは取り、補助すべきところは補助する。白馬の地価が上がり注目を浴びている中で、「こんなに安くてよいのか」と思われないう、奨学金制度も組み合わせて考えていくとよいと思う。

○パンフレットの写真は無機質なものをやめ、楽しい写真にした方がよい。中学生が見て、「こんな笑顔があるのだな」と思ってもらえるのが一番だと思う。

(5) 探究授業の協力者と情報交換

<担当教諭>

- 総合的な探究の時間（授業）は、生徒が興味関心のある分野と社会の課題をつなげ、生徒ならではの視点で解決策を提案し、実践し、考察する授業である。社会に出たときに必要な能力を育むことができ、白馬高校でも力を入れている授業になっている。社会経験の少ない高校生が課題を解決しようとするとき、地域の方の力が必要となる。
- 白馬村役場住民課環境衛生係のA氏 生徒発案の古着回収プロジェクト『エゴノミー』の支援やフードロスの活動等にも協力していただいている。
- 白馬村観光局のマーケティングB氏 ソーシャルメディアで白馬村の魅力を発信。生徒目線で撮った白馬の写真や動画を観光局アカウントで掲載してもらっている。
- 民間企業代表C氏 白馬村内に複数の飲食店を経営しており、空き家プロジェクトの一環として、壁のペンキ塗りや床のタイル張りなどのリフォーム作業を生徒に指導してもらっている。リフォームされたテナントは民宿として活用。期間限定ではあるが、生徒が宿泊費等を設定し、保護者の方に宿泊体験をしてもらうことも検討中である。

<白戸会長>

○白馬高校の探究に関わった感想や課題等をお願いしたい。

<A氏>

- 日頃からごみの減量化に関する業務を行っている。インバウンドの影響もあり、年々ごみの量も増えている。一人一人ができることから取り組んでほしいと思い、一昨年から10月30日に村内の食品小売店で食品ロス削減の街頭啓発を行っている。村長や県職員、JA関係者、白馬高校の生徒に協力を依頼。昨年は消費者庁の「食品ロス削減サポーター認定」の講座を受講した生徒もあり、一緒に活動する中で問題意識をもって積極的に取り組む様子が見られた。
- 古着回収プロジェクト『エゴノミー』について。冬場、長期滞在する旅行客がホテルに捨てていく衣類を回収し、リサイクルしていく活動だと聞いている。問題や課題を見つけて、積極的に役場を訪ね、アクションを起こしている。リサイクルやリメイク商品を販売し、その収益で公共施設の断熱改修を行うというサイクルを通じ、「廃棄物を発生させない」「リユースして使えるものは使う」「リサイクルして残ったものをゴミとして処分する」といった3Rの大原則を形にしていこうと期待している。集まる服（古着）は非常に多いが、それらを再び手に取って使ってもらうために

はクオリティも必要。そこには物理的（マシンが足りない）、技術的（服飾を専門としている人手等）な課題が出てくる。今後は地域の有識者や経験者とつながったり、中学生と一緒に活動したりするとよいのではないかと。地域とつながって面として動けるようになると、ごみの減量だけでなく、高校の活性化にもつながると思う。

< B氏 >

- 昨年の夏ごろ、高校2年生数名から情報発信に協力したいという申し出があった。観光局として運営している SNS は2つあり、インスタグラムを通しての PR を希望していたので、生徒からやりたいことのプレゼンを行ってもらった上で、サポートを開始。観光局としては若い世代への発信が課題の一つでもあったので、解決していく一つの案でもあると思った。SNS を運用するにあたってのリスク（4万9000人のフォロワーに見られていること、一度間違えたものを出しても取り下げられない等）の話を事前に行い、アカウント名『はくぷろ』で8月19日から投稿開始した。約1年で45回投稿。閲覧数が115万回ほどで、多くの人が見てくれている。白馬村のインスタグラムがこの1年間で獲得したフォロワー数は約780人。私たちが投稿するものより若い層に届く確率が高く、フォロワーの年齢層も全体的に若くなってきていると思う。
- 初めのころは表現の面でテキストを修正することが数回あったが、今はほぼない。先生も交えたオープンチャットでコミュニケーションを取りながら、投稿をしてもらっている。週に1回ほどのペースで定期的に投稿してくれているので助かっている。探究の授業だけでなく、1年生のころから普段の学校生活の中で撮った写真、例えば学年登山の様子などを共有し、村の公式で発信すると、自分のやっていることのアウトプットも増え、その先にいる SNS 利用者がどう反応するかも見られる。そうすると3年生になったときにもっとやりたいことが明確化するように思う。今年、白馬高校に入学した生徒（写真部）から写真の撮り方を教えてほしいと個人的に頼まれた。観光局として大きなイベントのボランティアに参加してもらうだけでなく、ドローンや360度カメラの操作方法、テキスト発信の仕方などアウトプットの部分で協力できればと思う。国際観光科の卒業生が大学進学したときに、「白馬から来た生徒はある程度の実務経験があり、違うレベルにいるな」と思ってもらいたいと思う。

< C氏 >

- 白馬駅前に4店舗運営。その中の1店舗を高校生とDIY。ペンキ塗りや壁はがしをする中で、資金繰りの話が出たので、長野信用金庫の支店長からお金（借り方等）について学ぶ機会を設けた。今年度の話は具体的には進んでいないが、高校生による宿泊運営のようなものを1～2週間実施することを検討中。OTAの手数料15%やリネン代等を考慮した上での宿泊価格の設定や、売上の使い方（集客につなげるための広告費等に回す）と一緒に学んでいけたらと思う。大人が考えないような面白いアイデアを生徒が出してくれるので、楽しく活動させてもらっている。

(6) 意見交換

< 草本委員 >

- 『エゴノミー』の活動について。本校の生徒も一緒に活動しており、先日は本校に在籍する服飾デザインの教員に手伝ってもらい、どういう風にアップサイクルしたら買い手が欲しくなるかを皆で考えていた。星形のポーチを作ったり、他の布から取ってきたポケットを違う服につけたり、とても楽しそうにやっていて素晴らしいと思った。
- イッセイミヤケのテキスタイルデザインを手掛けていた方が白馬に居住されている。子ども向けワークショップ等も実施されていて、そうした方の協力を得られればと思う。新しくリフォームした教室（白馬ラボ）に工業用マシンを置くと創作の幅も広がるし、文化祭などを利用して高校でアップサイクルした衣類を販売してもよいのではないかなと思う。

< 石川校長 >

- 文化祭の前夜祭で、シミがついて使えないような古着を全て集め、その中からアイテムを選ぶファッションショーを行った。生徒たちのアイデアに感心した。良い意味で、放っておいても自分たちで主体的に進められる生徒たちだと思う。こうした生徒の探究活動をどうすればもっと向上でき

るかが悩ましいところである。学校としては生徒が主体的に自由に動くことは、構わないが生徒の発案を受け止めて、要望に対してどう返していくか、観光局や民間企業などにどうつなげていくかが肝になる。自分でつなげていく生徒もいれば、そうではない生徒もいる。それぞれのプロジェクトに関わってくれる人材が必要。教員の負担が大きいことや教員という狭い世界からどうやってつながりを広げていくか、人材を見つけ出すかが学校の課題であると感じている。

<松澤委員>

○地域の人材に関しては、同窓会にぜひ声をかけてほしい。

<白戸会長>

○松本大学を作ったとき、「白旗をあげて地域にお願いしよう」という考え方をした。学校として一歩出することは難しいことでもあるが、お願いする覚悟を持って行動することが大事だと思う。

<石川校長>

○昨今では SNS 関連のトラブルが生じるケースがある。今は被害が及ばないように教員が目を配っているが、探究を進めていく上でリスクとの向き合い方も必要になってくる。リスク管理のことを考えると、学校を経由して活動を進めていくことになるため、少し煩雑になる感じがある。

<白戸会長>

○生徒の普段の生活や学習に関係するもので「BeReal」（写真をリアルタイムに投稿して交流するアプリ）があげられる。「BeReal」に投稿した写真に顧客名簿が写っていた例もあり、企業で大問題になっている。今の子どもたちはそうしたものに触れやすい状況。リスク管理等は、実生活に対しても意味のある話だと思う。

<B氏>

○見ている人（フォロワー）が多ければ多いほど、言葉遣い等も気を付けなければならない。例えばどこかで川が氾濫し、誰かが事故にあったときに、白馬の川の様子を面白おかしくあげるだけで傷つく人はいる。生徒には、社会にアンテナを張った状態で発信していくことが大事であると伝えた。そうしたことをよく理解して、きれいな写真や情報をあげてもらっている。高校の中でのルール、携帯を持つことでのリスクももちろんある。SNS 等と一緒に生きていかなくてはならない子どもたちだと思うので、リスクを感じながら、上手に付き合っていってほしい。

<白戸会長>

○情報リテラシーに関する講義は大学でもあるが、あまり学生たちには浸透していない。逆に、素敵な写真をアップしたいけれど何に気を付けなくてはならないのか、という流れの中で行えば、彼らにとって自分事となり、学びにつながる。座学では得られないような知恵や対応の仕方は、実際にやっていく中でしか学び取れないように思う。そういう意味では白馬高校の生徒たちは豊かな学びを実現していると思う。

<丸山委員>

○行政も発信には非常に気を遣わなければならない時代になっている。観光局はフォロワー数も多く、本当にポジティブなものしかあげないようにしていると思う。行政は住民サービスや課題解決に向けたものなど、ネガティブな情報を発信しなくてはならないこともある。高校の段階からリスク管理等を学んでくれるとありがたい。大人になって何がリスクか分からない状態だと、問題が重大化する世の中であるので、学校で学べるのは貴重な環境だと思う。自分が良かれと思ってアップしたものも場合によっては真逆になるリスクがあることや、ある情報を見たときに自分がどう捉えてシェア・リツイートすればよいのかを考えるきっかけとしてほしい。

<中村委員>

○探究のカリキュラムについて。もう少し詳しく教えてほしい。

<担当教諭>

○1年から3年まで段階を踏んで行う。1年で基礎を固め、2年は地域課題に対し興味のあるテーマに取り組む。大学受験を見据えた3年では個々に関心のあるテーマについて探究を進めていく。

<中村委員>

○自分たちでテーマ設定をしていく形なのか。

<担当教諭>

○テーマ設定は本当にさまざま。外に出て体験を通じて学ぶことが、生徒にとって非常に勉強になっている。0から1を生み出す仕事が増えていく中で、探究という授業は生かせる部分が多いように思う。

<中村委員>

○探究の授業を糧にクラブ活動のようなものにつながっていくこともあるのか。

<担当教諭>

○部活動につながったことはないが、プロジェクトにのめり込む生徒も一定数いる。例えば、先上がった『エゴノミー』。地域のイベントに参加することでつながりが増え、他校の視察に行ったり意見交換をしてみたり。探究の授業をきっかけに社会を知り、視野を広げていっている。

<中村委員>

○学年をまたいで一緒にやることはあるのか。

<担当教諭>

○3年の発表を1、2年が聞くなど、発表の場を一緒に行うことはある。

<中村委員>

○とてもよい取り組みだと思うので、クラブ活動のように1年生や2年生、学年をまたいで取り組むことがあってもよいのではないかと思います。

<石川校長>

○1年の「北アルプス学」の授業の中で、いくつか問い立てのもとになるようなエッセンスを生徒に植え付けていく。面白いと思ったことを探究テーマにしたり、あるいは、生徒の興味関心に即した地域ボランティアやイベントに参加することで探究につなげていたりしている。「総合的な探究の時間」という授業の中でできるものは実は多くなく、実際は時間割の外（例えば土日のボランティア活動、放課後活動）で自主的に探究活動を進める生徒もいる。今年度は3年生に対し、授業外で探究活動をする場合、3日間は公欠が取れるよう柔軟に対応。授業の枠内だけで探究をするということが、今のプロジェクト学習に馴染まないところもあると感じる。

<白戸会長>

○スタートは生徒の感性であるべき。大人が「えっ」ということでも、そこから始めることがとても大切。そうでなければ「やらされ感」が出てしまう。

○プロジェクトを継続していく場合、大人は前年度から継続して物事を考える。新しい生徒が入ってきたとしても、前年度の続きから進めるイメージを持つが、生徒にとっては自分たちがやりたいことではなく、先輩のやってきたことを引き継ぐ感じになってしまう。逆に、受け入れる側としては、毎年毎年同じことをしていくことになるが、それについてどう感じているか。

< A氏 >

- 食品ロス啓発運動に関しては毎年行っているが、発展的な動きはできていない。どちらかと言うと、こちらからのアプローチが不足している気がする。例えば、なぜリユースが必要なのかを考えると、「ごみの量が増えている」「埋立地が限られている」などの背景の説明が必要。それぞれが背景を知らないと活動の意義まで理解できない。できるだけ基礎的な話をした上で協力してもらう必要があるなど感じている。役場も担当者が変わるため、担当者がどこまで支援できるかは課題のひとつ。

< B氏 >

- 観光局においても担当者の課題はある。SNS はどちらかというと、アップデートよりいかに継続的に行うかが大事。生徒が変われば、またゼロからのスタートになると思っている。段階を踏みながら、毎年同じ流れで繰り返していくことになるかと思う。

< C氏 >

- リフォーム活動はDIY が主となり、2時間もペンキ塗りを持続すれば、やらされている感が出てしまう。そこに+α（何色のペンキにするか等）を生徒たちで考えて行うことが大事だと思う。

< 草本委員 >

- 以前、環境問題に関してアクションを起こし、素晴らしい土台を築いた白馬高生がいた。後輩がそれを継続し、発展してくれるだろうとこちらは期待していたが、叶わなかった。やはり生徒たちも情熱をもってやりたいことには力を注ぐが、そうでなければ「やらされ感」が出てしまう。
- 生徒たちが自走できる力をどうつけるかを考えないと大人が伴奏するのに疲弊する部分もある。
- 探究にこれだけ多くの地域の方が協力する高校はないと思う。今は高校での取り組みをポートフォリオとしてプレゼンし、何をしたいかを明確にPRしたものの勝ちの時代。大学受験でのメリットもある。
- 実践的な力を高校生活で身に着けるのはとてもよいと思う。企業側が欲しい人材を輩出することが大事。白馬高校から直接就職してほしいと考えている企業もある。実践的な学びを大学進学や就職にうまく接続し、進路をどう保証するかを明確化するとよいと思う。そうすると地元の子にとってもメリットとなる。

< 笹川委員 >

- 山岳に関連した授業はどの程度あるのか。高校には「山岳基礎（授業）」や学年登山などもあるので、意欲のある生徒が山の環境に身を置けるサポートがあるとよいと思う。山岳分野の人材として成長するきっかけにもなる。山案内人と情報交換しながら行ってほしい。
- 3年の選択科目で、小谷村山案内人と一緒に自然園の登山整備を行う授業がある。地域の大人にも声をかけ、地元の人と意見交換したり、山岳について理解を深めたり、課題を話し合ったりする機会にしてもよいのではないかと思う。

< 松澤委員 >

- 山岳に関する就職について、高校から地元の山を愛する人間を輩出できるとよいと思う。

< 白戸会長 >

- 地域の大人との関わりについて。周りの大人が生徒に期待しすぎていないのがよいと思う。地域に若い人が出ていくと、「若い人の新鮮な意見で素晴らしいことが起きる」と勘違いする人もいるが、実際はそうでもない。教員の立場で言うと、生徒は失敗した方が成長する。地域の人がかまく支え、生徒の失敗を小さくし、経験を積めるのがよいと思った。少し離れたところで見守り、生徒を育てていく雰囲気が大事。本来はコミュニケーション能力のない生徒ほど、こうした活動をするとうちで成長していくと思う。
- 大学では「地域貢献」ではなく「地域に迷惑をかけて学生を育てる」という考え方をもち、地域と関わらせてもらっている。今後は、「地域と学校の関係の作り方」や「教員の意識の問題」等

を議論していくとよい気がする。

(7) その他

＜田中聡主幹指導主事＞

○探究学習は学校の力だけでなく、地域の応援がないとできないものである。

○本協議会に参加したゲスト3名について。A氏はリサイクル、アップサイクルすることの大切さを生徒と一緒に考えてくれていると感じた。これからの探究学習は、小中で学んだことをどのように高校、大学につなげていくかが大切。地域に広げる横の展開と、小中高大という縦のつながりも重要であると感じた。B氏はSNSの影響力やリスクについて生徒と一緒にどうあるべきかを考えてくれている。探究学習には発表はつきもの。アウトプットすることが大事。考えたことをどのようにアウトプットしていくのか、とても大切な学習をしてくれていると感じた。C氏は経営という視点から、お金がどのように世の中に関わっているのかと一緒に考えてくれている。生徒のアイデアをどう実現していくか、生徒の考えをうまく引き出してくれているなと思った。

○探究活動は課題や困り感に対し、大人と一緒に悩みながら考えていくことが大切。その中で子どもたちは育っていく。答えの出ない課題に対しいろいろな立場で話し合い、解決策を見つけていく中で、さまざまな方との関わりが必要となってくる。今後も多くの方の協力をもらいながら、子どもたちの学びがさらに深まっていくことを期待している。

(8) 閉会の言葉

以上、第2回学校運営協議会は終了。